

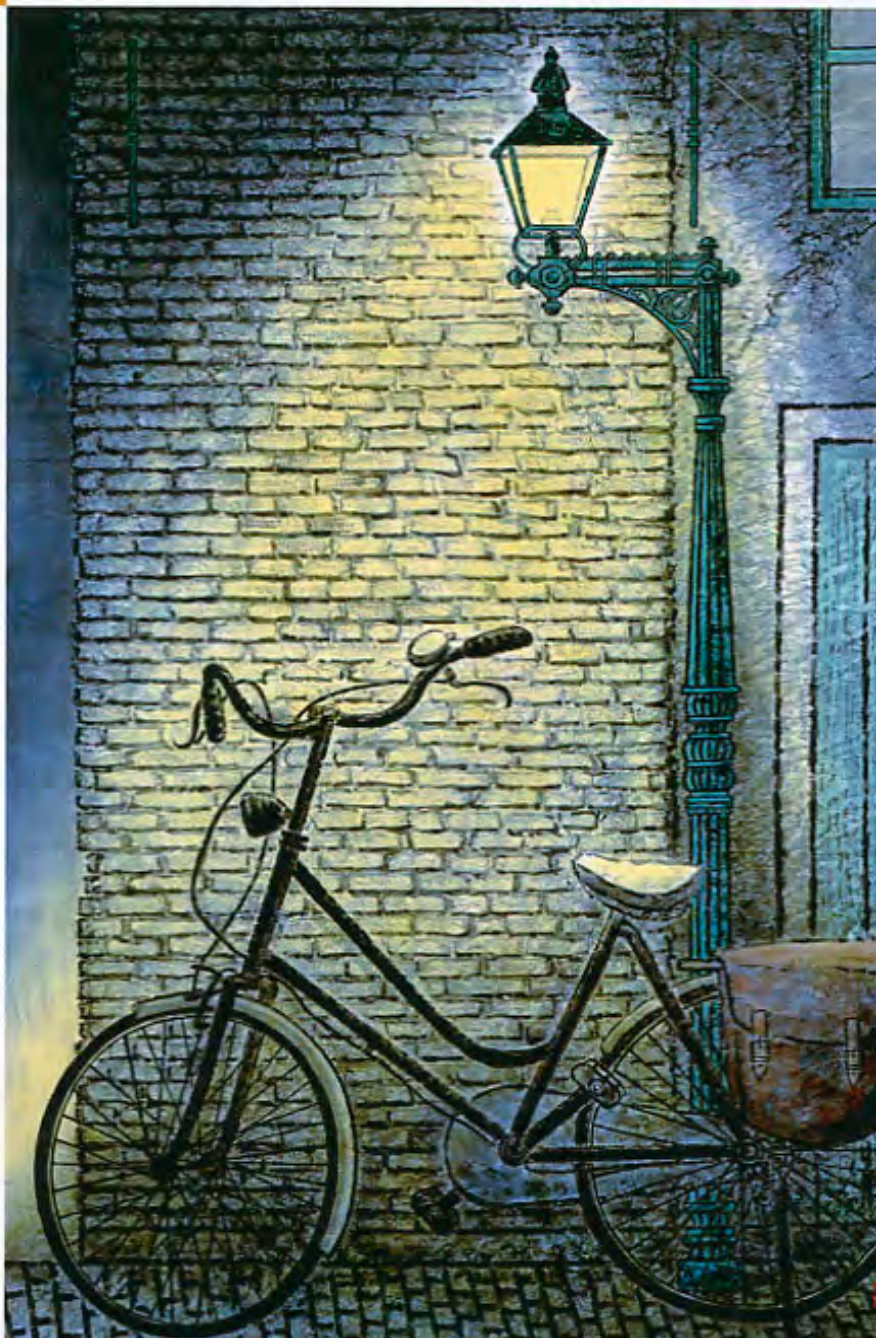
# 沖

# 10

2017

平成29年「沖」俳句コンクール発表

俳句雑誌[おき]



# 黒胡椒

能村 研三

## 鵜宿の句碑

昨年十一月「北陸勉強会」で訪れた、石川県中能登町良川の鵜宿に私の句碑が建立された。

昨年勉強会の後、十二月十六日早暁に行われた「鵜祭」を見に行った時の句である。

### 鵜に勸進眉丈の夜氣の冴ゆるかな

落蟬のもがき力の尽きてなほ  
長考のあとの直感甚平着て  
葉が鞭に舐先払ひ蓮の道

抽斗に指を噛まれて休暇果つ

鵜祭については、本年「沖」二月号に、鵜祭の四句と随想を掲載しているので詳細は省略するが、七尾市鵜浦町の海岸で生け捕りにされた鵜が三人の鵜捕部によって氣多大社までの約四十キロを三日かけて徒歩で運ぶ。籠に入れられた鵜は「鵜様」と呼ばれ、道中、鵜捕部は「ウツトリベー、ウツトリベー」と連呼して通過を住民に知らせ、鵜に勸進する。眉丈山は鵜宿の後ろに位置し、大きな山ではないが良い名である。

句碑の建立は、鵜宿の管理保存をされている道端ご夫妻のご好意によるもの。鵜宿の玄關近くの池のほとりに建てられ、私にとつては初めての句碑である。今回の句碑は私の揮

蟬の穴余震つづきを知つてをり

鶏冠のまだ揺れてゐる野分あと

和紙の腰指で確かむ涼あらた

晩夏なり男料理の砂時計

厄日来てざくざくと挽く黒胡椒

そよがずに匂はずにゐる曼珠沙華

毫した字ではなく活字で刻まれたものである。

八月十七日にこの句碑の建立のため道端さんとの連絡を懇切丁寧にして下さった阿部眞佐朗さんに同行いただき、妻と娘の麻衣を連れて見に行った。

父の十五の句碑を管理しているだけで大変なので、自分自身の句碑は造らないと心に決めていたが、道端さんの熱心さに打たれて建立を決意した。

鶉宿の入り口には、道端齊さんの句碑も合わせて建立された。

#### 鶉の祭り支へし宿に能登時雨 齊

道端さんが「北國新聞」俳壇へ投稿されたもので私の特選句である。

能登には七尾市の和倉温泉と羽咋の正豊院に父の二つの句碑がある。父の句碑に守られながら、能村家にとつてゆかりの地である能登に句碑が建立されたことはうれしいことだ。

能村 研三

# 蒼茫集



みつしりと

辻美奈手

\*みつしりと水の断層キャベツ切る

脳髓の真上より来る日雷  
眩暈の彼方でにいにい蟬が鳴く  
俯いてをれば向日葵だつて楽  
いつまでも明日あるごとく夏休  
冷房よく効いて缶入りの気分

一都五県

楠原幹子

涼しさや竹林わたる風青き

\*大利根の一都五県を統べて朱夏  
蛇泳ぐ鎌首六十度にもたげ  
汗拭いて顔の小さくなりにけり

遠花火つなぎくる子の手の湿り  
発展の行き着くところ流れ星

一語一韻

酒本八重

\*遺されし一語一韻涼しかり

あかんぼう抱かせてもらふ少し汗  
すいれんの葉だたみ踏みて行けさうな  
ふところ深き高麗郷の青葉木菟  
秋風となりし烟りの行方かな  
九十が吾が齢なり花むくげ

合歓の花

大川ゆかり

テーブルに光る塩粒朝涼し  
夏休み顎に伸びたる帽子紐

\* 合歡の花ひかり分け合ふやうに咲き  
噴井より抜きて十指の白さかな  
はたたがみ短き言葉返されて  
冷しさうめんの昼餉海風よく入り

蓮 見舟 吉田政江

今朝咲きし一花へ寄せて蓮見舟  
舞妃蓮手賀の沼風流しけり  
\* 蓮手折る風に繭糸の遊びかな  
蓮叢を分け入りしつべ返しかな  
舟通すあとより閉ざし蓮の沼  
きな臭き電波飛び交ひ凌霄花

晩夏光 森岡正作

\* 調律師色なき風も聴き分けて  
土用かな刈らねばならぬ草に座し  
夏草を刈る容赦なく小気味よく  
抱き寄せて終の向日葵刈りにけり  
手の平に蛍の匂ひ持ち帰る

彫り深き男なりけり晩夏光

異 界 千田百里

手賀橋を潜れば異界紅蓮

抽んづる蓮の宝珠の紅著し

\* 「暗夜行路」生れし沼辺に夏惜しむ  
朝顔がひらく美容院があくよ  
野分だつ謀反ごころのなくはなし  
かかる夜は突堤に出づ盆の月

卒寿われ 秋葉雅治

泰山木咲くや魯迅の奥つ城に  
朝顔市母の生地は入谷なる  
\* 卒寿創刊九十年にてわれと岩波文庫夏  
手囲ひにいのち灯せり初螢  
息継ぐ間あらばや越の火花火  
落武者に似て喉すべる冷さうめん

帰省子

小山田子鬼

\* 帰省子の髪を許せぬ一日目  
朝顔の紺にまみれし一日かな  
母郷とはひぐらし鳴ける空のいろ  
すかんぼを噛めばおつとり牛の声  
わが余命いくばくならむ糸とんぼ  
手花火やあの世さみしきかも知れぬ

畦道

高橋あさの

朝雲はしづかに西へ原爆忌  
向日葵や呼び止められし如く見て  
雨後の草まだするどくて晩夏光  
踊唄の風が運ぶを口遊む  
\* おしまひは畦道でみる揚花火  
かまつかの明るき道の理髪店

修正ペン

田辺博充

姿見にわたしのアンドロイドや夏

通し鴨澗に瞑ること多し

烏揚羽汝が前世さぞ華美なりけむ  
河骨をわが生の花と思ひたし  
日田杉の下駄買うて涼新たななり  
\* 修正ペンふれば鳴るなり敗戦日

甘撚り

細川洋子

樹齡千年常緑の闇蟬時雨  
蟬時雨歩幅の違ふ四人行く  
切々と跣足仏足石十趾の袴りかな  
\* 平泳ぎ水は胸襟ひらきけり  
新涼や甘撚りの穂の吹かれぬる  
颯と竹半円に敷き銚回す

満ち足りて

甲州千草

星今宵泣くなと言へばなほ泣いて  
県道と沼の間の海桐の実

\*雲切れて葉月の沼の白光す  
首長の鳥翔つ沼の散蓮華  
蓮の葉につぎつぎ打たれ舟進む  
満ち足りて蓮華酔ひなる戻り舟

アリア 林昭太郎

\*何にでも名前書く母鳳仙花  
踊の輪入るも出づるも踊りつつ  
星涼し人の数だけ皿の出て  
仲見世は異国語の渦終戦日  
空調の音のみが音日の盛り  
星今宵アリアは耳環ふるはせて

鼓動 今瀬一博

蓮見船惰性となりて止まりけり  
蓮の葉に露の百態見て飽かず  
\*白蓮の珠解くまでの鼓動かな  
紅蓮のひとときは高き一花なり

紅蓮の茎の湾曲老女形  
蓮の花風に全長もて応ふ

軍鶏の太足 福島茂

海開き太陽に潮掛けてやる  
フアールになりきつてをり捕虫網  
横須賀を歩くに欲しきアロハシャツ  
\*八月十五日いつもの畑に父のゐて  
踏みしめる軍鶏の太足夏旺ん  
バス停に同じ顔ぶれ朝曇

海桐咲く 鈴木良戈

海桐咲く崖の半ばに水走る  
海紅豆海辺の駅の南口  
父の日の卵の黄身の濃くふくれ  
朝顔市二の腕太き乙女かな  
浜茄子を見しこと夢の奥にまで  
若人の六根清浄山開

# 潮鳴集



渦

高木嘉久

\* パナマ帽決めて退職一年生  
日本橋に空戻るとか夏の雲  
理科室にあがる歓声夏林み  
蚊遣尽き律義に渦を残しけり  
対向の電車がら空き夜の秋

鳩サブレ

辻前富美枝

\* 実朝の海はべた風震災忌  
さやけて家苞に買ふ鳩サブレ  
難解なクロスワードや一葉落つ  
濃竜胆活けて名刺の女持ち  
誰彼の遠くなりたる秋の風

無

音

七種年男

\* 奥飛驒の雲湧く峡田夏燕  
炎帝に鷲掴みされ地下出口  
桁数のどんどんふゆる蟻の列  
無音てふ音符の如き遠花火  
人影に鯉の寄りくる晩夏かな

落し蓋

菊地光子

\* 秋めくや煮魚に木の落し蓋  
故郷のほど良き遠さ花茄子  
釜飯の蛸のうす切り早空  
髪染めて夏に負けたること隠す  
話さねば言葉忘るる虹二重



無音 森村江風

怖づ怖づと殻なき自由なめくぢり  
蟬しぐれ刹那へ刹那鳴き重ね  
遠花火捨てたる夢のそつと爆ず  
悲喜あるも悲喜なきごとく一葉落つ  
\* 無限へと無音膨るる星月夜

絹漏斗 植村一雄

炎帝も老ゆる刺子の生乾き  
夏了るロケット立ちの一气飲み  
滅茶割れの西瓜とつさの赤しづき  
\* 愛の挨拶朝顔の絹漏斗  
冷やかに義齒とふサイボーグ気分

地より湧く 大沢美智子

撓ひつつひかり投げ来る鮎の竿  
\* 蓮咲いて水いつせいに力解く

沼の面にモネの眼ひそか紅蓮  
滝壺や翅あるものを吸ひ寄せて  
宵宮のだんじり太鼓地より湧く

脱け殻 座古稔子

\* 空蟬や詠まねば吾も脱け殻に  
余命とは生きるよろこびさくらんぼ  
風鈴や風の吐息を見逃さず  
ひとり居の窓みんみんの今日は  
水郷の秋や田舟の行き通ふ

虹の根へ 篠藤千佳子

虹の根へ行つたきりなり球拾ひ  
往路雨復路大雨かたつむり  
\* 大夕立無音の中に居るここち  
各階に止まる酷暑のエレベーター  
歴史家の家に常駐ひきがへる

# 飛鷹選評



能村 研三

炎昼やビルの生み出す棒グラフ 茂呂 昇平

新宿の高層ビルを詠んだ福永耕二の〈新宿ははるかなる墓碑鳥渡る〉の句があるが、新都心と言われるような街区には高層ビルが林立する。炎昼の中、うなぎのぼりに上っていく温度上昇を示す棒グラフのように、高さを競いあつてビルが建設されている。

千早赤阪村哀歌と聞こゆかじか鳴く 前川 京子

千早赤阪村は大阪の南河内地域に位置していて、大阪府下で唯一の村で楠木正成の出身地としても有名である。明治時代、「河内音頭」で歌われる一節「男持つなら、熊太郎弥五郎十人殺して名を残す」でも知られる。「河内十人斬り」の悲しい事件が起こったことでも知られる。かじかが鳴く静かな村だが、その秘話を今に伝えている。

逆光の人を待ちをり 白日傘 稗田 寿明

面白い俳句である。白日傘をもって立っている人は、果たし

て。自分がこれから会おうとしている人なのか。多分間違いないと思うのだが、逆光に照らされているので確信が持てないのがもどかしい。

背泳ぎの手をとめ海に抱かれをり 嶋本 博司

行き先が見えずに見えるのはただ空ばかりで真上には真夏の太陽がきらきら輝いていた。背泳ぎは他の泳法とは違って気分が爽快になる。手を動かすのを止めた途端、海に浮き浸かった体はまるで海にやさしく抱かれているようであった。

炎帝に気棲合はせし身をいとふ 米田 紀子

炎帝が支配する暑い夏を乗り切るには、いろいろと対策を考えなければいけない。特にシニア世代ともなると、水分補給や睡眠そしてしっかりと食事をとることなどを心掛けなくてはいいけない。気棲を合わすとは相手が気に入るように調子を合わせることで、上手に暑さとも付き合っていかなければならない。

日傘中我だけにある時間かな 伊藤よし江

日傘の相合傘は聞いたことがない。太陽が燦燦と輝くなか一人での至福な時間があった。

巻き戻しきかぬ人生牽牛花 吉澤 濱子

吉澤さんは九十の齢を越えられたが、お元気で中央例会にも出席をされている。巻き戻しのかかぬ人生を一步一步大切に過ごされている姿勢に頭が下がる。(以下略)

大沢美智子

## 八 海 山

八海山に雪形はつか桐の花  
きしきしと谷渡りけり山の蝶  
少年童真帆となりゆく捕虫網  
夏霧の迅し雪室あらはるる  
雪室の重き錠前あいの風  
千噸の雪の底ひや藁匂ふ  
酒蔵をめぐる沢水ほととぎす  
田に声や手送りにする早苗束  
棚田澄む早苗の根付く静けさに  
河鹿笛にはかに高し沿うて行く

なだれ立つ柱状節理滝落とす  
雪解川フォッサマグナの峡走り  
峡谷のVの切れ込み遠青嶺  
びつしりと山に星あり洗鯉  
星涼し板盛りの蕎麦波打つて  
青葉木菟夜つびて誰を待つ声か  
菜の花のなごり咲き見ゆ魚野川  
雲洞庵  
大いなる板木のゑぐれ薄暑来る  
方丈の庇のかげに燕の巢  
禅僧の起ち居一畳緑さす

# 沖作品



# 能村研三選

炎屋やビルの生み出す棒グラフ  
青田千枚統べて坂東太郎かな  
打ち水のH<sup>2</sup>O粒なして  
くろがねの風鈴の音に訛あり  
遠海の潮風寄する夏座敷  
千早赤阪村哀歌と聞こゆかじか鳴く  
幾何学の耐震校舎砂灼けし  
地球儀の海の碧さよ夏休み  
伸び盛りの児に挟まれし熱帯夜  
打ち水や那智黒の黒艶めけり  
バスケットゴール立つ庭梅雨明くる  
青色の糊で封する涼しさよ  
逆光の人を待ちをり白日傘  
柿青し最後まで聴く子の主張  
流星を抱擁したる安房の海

市川市

茂呂 昇平

奈良

前川 京子

千葉

稗田 寿明

くちなしの鏑を諾ふ齡かな  
背泳ぎの手をとめ海に抱かれけり  
素潜りの総身に染むる海のを  
声高く唄へば青春雲の峰  
薬師寺の塔を見下し雲の峰  
胸憶の掬飲の水ケルン積む  
万緑や縄文土器のなほ模様  
あまつぼを一音の雷一と夕立  
瀬の音の転がり濁る半夏雨  
炎帝に氣棲合はせし身をいとふ  
日傘中我だけにある時間かな  
潮と陽の香る子一気西瓜食ぶ  
蒼天へ初穂つんつん風渡る  
鶏鳴に目覚むる秋の母郷かな  
開け放つ窓に大灘西瓜食ぶ

東京

嶋本 博司

石川

米田 紀子

千葉

伊藤よし江